

るのほな

千葉大学医学部同窓会報 第82号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るのほな同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線2038

記念式典にて挨拶をされる
香月先生→

祝賀会場における
香月先生御夫妻↓



祝賀会はニューパークホテルで行われ、学内外の人々約四百人、ついで井出源四郎学長、るのほな同窓会長の代理として有益忍副会長、また山下生代表として山口豊教授、同門代表として福岡誠吾千葉県がんセンター長等より祝辞・謝辞が述べられた。

次いで彫刻家佐藤忠良氏の記念講演があった。

香月秀雄学長には去る7月31日付で、千葉大学長を退官された。これにともない10月9日(土)午後2時30分より医学部記念講堂で、退官記念式典が開催された。式典は

渡辺昌平病院長の司会で、先ず秋原弥四郎医学部長より、永年におたる教官として、とくに病院長、医学部長、学長としての御努力に對してねぎらいとお礼の挨拶があり、

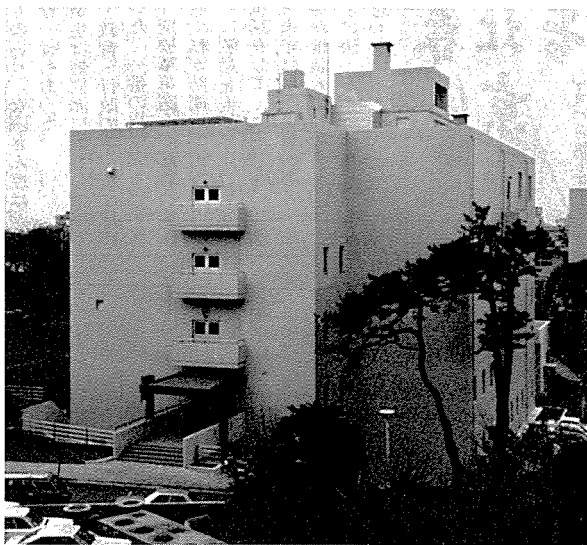
昭和57年10月9日

香月秀雄学長 退官記念式典挙行

千葉大学医学部 動物実験施設竣工

医学部本館(旧病院)前にかねてより建築中であった「千葉大学医学部動物実験施設」がこの程完成し、写真の如くクリーム色の偉容を誇っている。サル、イヌ等の大型動物からはじめ、動物の移動が開始された。

(着工56.9.30、竣工57.9.20、総面積4,200㎡、工費 約10億円)



昭和57年秋の叙勲

人程集い盛会を極めた。なお秋の叙勲で紫綬褒賞の榮譽をうけられ退官後は放送大学学園教学企画責任者(学長予定者)として放送大学の発足に向って努力をされと聞いている。

中山恒明先生 勲一等瑞宝章
(昭和9年卒)

松本 胖先生 勲二等瑞宝章
(昭和10年卒)

福山右門先生 勲三等旭日中綬章
(前解剖学教授)

星野ひで氏 勲五等瑞宝章
(前看護部長)

香月秀雄先生 紫綬褒章
(昭和16年3月卒)

第59回千葉医学会 学術大会開催

昭和57年11月20日

第28回千葉県医師会学術大会、第21回日本医師会医学講座との連合大会は、昭和57年11月20日、千葉県医療センター講堂にて開催された。「話題」として千葉大学医学部の佐藤三教授による「精神科的救急医療」覚醒剤乱用と仮面うつ病への対応とその間にあるもの」の講演のあと、東京女子医大の清水喜八郎教授の「抗生物質療法の現状と問題点」の特別講演が行われた。会場を大学から医療センターに移した試みであったが昨年より参加者が増し盛大であった。

熊谷 朗教授

富山医科薬科大学副学長に就任

祝賀歓送会開催される

昭和57年7月27日千葉コミュニティセンター「東天紅」において第2内科科学教室主催により熊谷朗教授の富山医科薬科大学副学長（兼附属病院院長）就任の祝賀歓送会が開かれた。当時発令前でもありごく内輪な会であったが、萩原新医学部長、渡辺附属病院院長はじめ、稲垣・平山両内科教授、諸橋旭中央病院院長はじめ基幹病院各院長、非常勤講師の諸先生、第2内科科学教室同門会長はじめ幹事の諸先生方のご来臨あり、教室員および関係者170名が出席する盛会であった。熊谷教授は昭和46年2月、大阪大学医学部第3内科から当教室の主任教授として赴任され、11年の

昭和7年卒業生

七葉会のメンバー

秋深き母校に集う

10月23日はこの秋美しく晴れた日の一つであった。遠くは秋田、岡山からの人々を交え十二名の七葉会々員は、医学部本館旧病院を巡り、屋上に出て四方の景色を懐しみ、新しい病院を訪ね、何十年ぶりに野球場の土を踏み等秋をたのしんだ。この会の中心である小林龍男名誉教授の発案で車を連らねて港に廻り、泊船と夕日を

た、千葉での業中途にして去られることへの惜情を述べられた。教室員全員また惜別の情を表すのに言葉なく、ただ多くの花束にその情を託するのみであった。残

山東省立医専卒業生と三十五年振りの再会

鴻

忠 義 (昭和13年卒)

中国の済南には古くから医専があったが、日中戦争の進展に伴い重慶に疎開してしまつた為、閉鎖されたままになっていたのを、済南に司令部を置く第十二軍の軍医部長 川島清少将（千葉医専大正五年卒業・山武郡で健在）の強い要請で昭和十八年に再開された。教授陣は日本と中国から半数づつ、日本側は東大と千葉から半数づつということにし、臨床は私の勤めていた同仁会済南病院で行うということが発足した。

私は眼科の教授に任命されたが何分にも大学卒業五年位の浅学非才であったので、講義は専ら恩師伊東教授の講義の丸写しであったが、計らずも伊東教授の孫弟子が中国に誕生ということになったわけである。

終戦後は重慶に疎開していた教職員が追々帰って来て戦前の医専を復活させた。

私は昭和二十三年春まで奉職して帰国した。帰国後は第一回卒業生とは年賀状の交換など文通があったが、文革以来は音信は全く途絶してしまつた。

された教室員が個々の研鑽と今後の千葉大学医学部内科科学教室の発展を期すれば、最良の辞となるう。

(第2内科科学教室記)

所が思いがけず五十七年の旧正月に眼科専攻の股骨から年賀状が届いたことから文通再会、北京に招待されることになった。始めは眼科専攻の三人の人達と会う筈であったのが、学生時代もクラス委員をしていた高君が世話役となり三十五名が卒業した一期生の有志十一名が北京に集ることになった。

歓迎会は家鴨の丸焼きで有名な北京烤鴨店で催された。三十五年振りの再会ということで感慨無量

五窓会の記

昭和23年医専クラス会

五窓会のネーミングは医専五期及び五倫に由来しますが、私共は会場を持ち廻り制に変更して毎年クラス会を開催しています。

今回は去る10月23日、東京高輪プリンスホテルに於いて、東京在住の当番幹事竹内盛、クラス幹事志鎌重知両君の企画で開催されました。

お招きした恩師安中正哉先生は急用のため突然の御欠席でしたが集った級友は29名。会には竹内君の司会で進められ、始めに空路秋田より参加した齊藤敏孝君の音頭で級友の健康と会の盛会を祝して乾盃。戦争末期及び終戦時の混乱期にかけて多感な時期を送ったものはな台での想い出話や、最近の各

方面での活躍の様子等に話はずみましたが、耳順に近い齡いはたまたま世代的交替期の入口にさしかかる頃なのではないか、二世の就職、入局先或は縁談等の話題が多い様でした。

歓談途中、級友の希望であるのは台の近況について越川より報告更に新同窓会館建設資金募金に際しての協力方懸望がありました。更に盃を重ね、午後9時30分飲みきぬまま、次回開催地千葉での再会を約して散会しました。

(越川 衛記)

春風苑李満天下
北京重逢情誼

五三二年九月日本教授来中国北京访问
同師輩高君三十余載重会一堂暢叙离情
学生再聆教海受益良深老师高年身健
精力充沛 王嘉明
鴻忠次教授留念 学生服嘉明敬啟

なるものあり、女医さん達は涙にうむ一瞬もあった。

卒業生は皆立派に成長していて臨床・教育・行政の第一線で活躍していた。一番の出世頭と思われるのは開放軍軍医大耳鼻科教授の梁君で私が防衛大学教授であったことに敬意を表してか、つききりて世話をしてくれた。

席上来年は軍医大学のある西安で梁君が世話人で同級会を開催することに決めたが、亦行ってみた

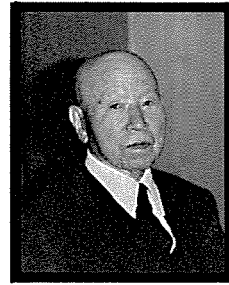
因に山東省立医専は他大学と合併して現在は済南大学となっているが、かつて川島軍医部長の幕僚で山医医専設置の企画をされた小西俊造軍医は現在、山口大学の学長をされておられるが、山口大学と済南大学は友好大学となつて交流を深めていると聞いている。

写真は歓迎会席上で贈呈された軸であるが、春風苑は恩師、桃李は生徒という意味です。

(元 防衛大学教授)

岩津俊衛名誉教授

逝去さる



止となった。更に初期子宮癌早期診断の一環として御園生助教授（後に教授）らと共に、TPT・SH法の細胞化学的細胞診の研究を進められた。これらは初期子宮癌診断上極めて有意義なもので、今日の子宮癌死亡率低下と直接関連した優れた業績である。

先生の臨床講義は学生のみならず教室員の講義をも兼ね、そのユーモア溢れる話しぶりは常に屋階講堂をにぎわした。また、先生は東大時代式テニスの選手としておられた関係で、千葉にお出でなつてから、一時期硬式テニス部の

去る八月二十二日、緑陰に輝しぐれのふる千葉市霊園において故岩津俊衛千葉大学名誉教授の葬儀が肅々と取り行なわれた。

先生は岡山一中、一高、東京帝国大学の御出身である。大正七年東大を卒業。産婦人科教室にて研鑽の後、大正十五年千葉医科大学産婦人科助教授として招かれ、昭和十三年教授に昇任された。昭和三十三年停年退官されるまで、斯学にも数多くの足蹟を残された。退官後も国立千葉病院、川鉄千葉病院の顧問に就任され、後輩の指導育成に尽された。



故滝沢延次郎教授

十三回忌法要

去る10月24日、滝沢家の主催で先生の13回忌の法要と追悼会が開催された。井出源四郎学長、岡林名誉教授、近藤教授、岩崎助教授

村田謙蔵先生等々門下生約50名が集い、午後三時から足立区の実相寺で厳粛な法要があり、その後久しぶりに墓前にぬかづき、ご冥福を祈った。その後東大・学士会館別館に席を遷え、先生の写真の前で追悼会が持たれた。井出学長の名調子の思い出話に始まり、殆んど全員の追悼談があった。厳格な学者としての態度・長時間にわたる御説教、毎日終電車で東京へのお帰りなど多くの思い出話に時間のたつのを忘れる一時であった。未



亡人の貞子様、長男延彦氏（東京都がん検診センター）、三女徳子様も皆お揃いでお元氣であった。

田澤敏夫先生（昭和24年卒）

を偲んで

成田赤十字病院院長

横田 仁（昭和27年卒）



この世に終りを告げ、去つてしまいました。未だに信じたくない真実を見つめ、残念でなりません。「天は人に二物を与えず」と申しますが、田澤先生には、優秀な頭脳と立派な体格、加えて、強靱で繊細な精神、正確な判断力と決断力、医師として、又経営者として、全ての物が備わっていた様に思います。好男子で、背筋を真っ直ぐに延ばし、大股で廊下を闊歩する姿は、男性である私達でさえ惚れ惚れとしました。その上、成田赤十字病院のベンケイシーとも

当時、看護部、事務部の幹部は、先生に敬服して居りました。特に印象強く残っている事は、あの空港設定時の闘争による、負傷者の取扱ひであります。負傷した警察官、学生が、廊下に多数横たわり、手の施し様がなかった時に、たちまちの内に、学生、警察官を区別、病棟に収容し治療され当院に収容された患者は、全員完治退院しました。内臓破裂の学生は助かる可能性ゼロと言われて居りましたが、慎重な診断と治療により、完治し退院しました。先生のその時の姿は、まさしく、成田日赤のベンケイシーそのものでありました。

先生の趣味は、読書にゴルフ、それに、酒。たばこもよく嗜まれました。特にゴルフはシングル級で、話しに興じて居られる時の笑顔が眼に浮かびます。

五十六年四月、院長になられた先生は、希望と意欲に燃え、病院の運営を常に頭に置き、職員全てが一丸となつて、北総地区の中核病院として、地域住民に貢献しようとする設計図は、頭の中に描かれていた事と思います。しかしその設計図も、先生の頭脳に納められたまま、他界されてしまいました。我々は、先生の計画の一部を聞かされております。その計画を、現在慎重に進めつつあります。

先生の医学に対する信念と、医の倫理を受け継ぎ、幾多の苦難があると思いますが、それを乗り越え、立派な病院を造り上げて行きたいと思ひます。どうぞ我々の行方を、お見守り下さい。

東京ゐのはな会

— 国立がんセンターとの懇談会 —

都内主要病院と東京ゐのはな会との懇談会は、昨年十月、女子医大との間で行われ、かなり好評であったので、本年度は第二回目の企画として、国立がんセンターのスタッフの御協力を得て、昭和五十七年十一月六日(土)同センター内の管理棟、A講議室にて開催された。

当日は市川平三郎院長(昭和二十三年卒)の挨拶の後、講演会に移り、

診断

森山紀之先生(放射線診断部) 昭和四十八年卒

二、新しいX線画像システム
山田達哉先生(放射線診断部長) 昭和二十八年卒

の二題の講演があり、会員に多大の感銘を与えた。出席者、七十名で満員の会場では、熱心な質疑も行われた。

次いで近くの、すえひろ築地店に会場をかえて、懇親会が行われた。市川院長、山田、森山両講演

静岡ゐのはな会

勝 呂 安 (昭和20年専卒)

隔年に開催されている静岡支部(会員183名)総会が去る八月二十八日佐藤通(昭三十五年卒)幹事の御骨折りで熱海市ホテル大野屋で開催、60数名が参加した。総会を前に佐藤博教授の「食道癌の診断と治療」大藤助教授の「消化器疾患の超音波の応用」と題する学術講演が県東部医学会の協賛で行なわれ、会員に多大の感銘を与えた。

総会はスズラ隆理事の司会で進められ、大塚三八雄支部会長(昭六年卒)挨拶のあと中村武、勝呂安常任理事より庶務及び会計報告、つづいて御多忙の中を御出席頂いた来賓の先生方から御挨拶があった。小林同窓会長は医師過剰時代を迎え本学卒業生の研修、就職の

為に大学は地方の関連病院をより真剣に考えるべきだと述べられ、又井出新学長は就任の抱負を、吉田教授はスライドを用いて母校の偉容を語られた。このあと八月三十一日に77才寿寿の誕生日を迎える大塚支部長に支部からお祝いの腕時計の贈呈を行った。続いて大広間で懇親会に移り支部名譽会員三輪先生の乾盃。七月一日付沼津市立病院顧問に就任の北村名譽教授、沼津市立病院平岡新院長(昭三十八年卒)の挨拶のあと開宴、さすが熱海か佐藤通幹事の顔か、若くビビビの美人芸妓多勢揃つての唄と踊りで本場の日本情緒を満喫した。宴酣の頃花束を贈呈さ

者、中沢幸一(昭二十八年卒)水口公信(昭二十八年卒)、荒木英爾(昭三十四年卒)、小野勇(昭三十五年卒)、岡崎信生(昭三十七年卒)、松江寛人(昭三十七年卒)、平賀一陽(昭四十二年卒)、吉田孝宣(昭四十六年卒)、石毛英男(昭五十三年卒)の各先生より、自己紹介を兼ねてその活躍ぶりを披露して頂き、出席のゐのはな会員は改めて心強さを感じた様であった。今回の催しをふり返って見るとこの様な有意義な講演は若い会員諸氏の出席増にもつながる様で、昭和六年卒から昭和五十三年まで幅広い同窓会が列席され、主催者としても心強く感じた次第であった。



静岡県支部総会 S 57.8.28

れて御礼に立ち上った井出学長は海軍々医時代乗組みの海防艦の終戦秘話を披露し一同静聴する一幕もあり、和氣霽々のうちに忽ち時間はずいぶん過ぎた。二次会は街のクラブ「扇」へと繰り出した。扇では作曲家木村好夫氏のギター演奏もあり夜の更けのゐの忘れ飲みかつ語り熱海の夜を堪能した。

つた。
尚次年度は支払基金におられる東京ゐのはな会員との会を開く予定である。

白兔会 (昭和17年卒業生の会)

卒業四十周年記念

我々のクラスは、昭和十七年九月卒業ですが、入学したのが昭和十四年の兎年でありまして、大國主命と因幡の白兎の故事にちなんでクラス名を「白兎会」と命名しました。

昨年九月は卒業後丁度四十年になりましたので、去る九月十八日に卒業四十周年記念の会を母校の大講義室(旧大学病院五階の臨床講堂)で開催しました。内田、数馬両君の司会で、先ず亡くなられた級友に黙祷をささげて御冥福を祈りました。ついで、記念事業として新病院の前庭に記念樹をすることを決定しました。又、卒業の際にクラス誌「白兎」の創刊号を発行しましたが、今回は卒業四十周年記念号として「白兎」第四号を発行しました。四十名の級友から原稿が集まり、立派なクラス誌ができ上りました。

記念会終了後、千葉ニューパークホテルに於て、恩師の鈴木五郎三輪清三、小林龍男の三先生をお招きして謝恩会を開催しました。級友は二十九名出席し、盛會裡に楽しい一時を過ぎ旧交をあためることができました。我々のクラスは卒業の時は七十九名でしたが、その後戦死十一名病死八名、計十九名が亡くなられた現在六十名になっております。

戦後毎年のようにクラス会を開催しておりますが、特に昭和三十二年以来、毎年一月十五日に東京で総会を開催し、(周年は千葉で開催)いつも二十数名が出席しております。又、夏には「ビールの会」や旅行なども行っておりまして、この数年來は湊君のお世話で、関西方面に於て古い寺や神社、仏像など鑑賞の旅行を行い、家族同伴で十数名が参加しております。なお、クラス誌「白兎」は四号まで発行しましたが、記念写真集も卒業後二回作っております。このようにして級友の親交を深めるように努力しております。我々のクラスは既に殆どの諸君が定年を過ぎ、第一線を退いて第二の人生を送っておりますが、みんなそれぞれの立場で元気に頑張っているようです。



白兔会 (卒業40周年記念) S 57.9.18

終りに一つお願いがあります。現在六十名の級友のうち、渡川陸雄君と保坂栄治君の消息が全くわかりません。同窓の皆さんの中でこの二人の消息を御存知の方がおりましたら、ぜひお知らせ頂きたいお願い申し上げます。

卒業四十周年記念会の出席者は猪野、植竹、内田、浦部、浦田、浦野、梅沢、遠藤、大村、数馬、窪田、児嶋、小林(清)、佐久間、高瀬、高橋、田島、茅根、豊島、中村、西沢、長谷川(安)、藤村、藤江、宝積、松田、松永、水間、村上の二十九名でした。

(白兎会幹事 水間正冬記)

本号が4頁であったため、いくつかの原稿を次号にまわさざるを得なくなりましたことをお詫言ひ申し上げます。それら原稿の主なるものは、クラス会報告(昭20専・四葉会、昭26専、昭27専)、埼玉のゐのはな会記事、第55回解剖慰霊祭と白菊会総会記事、二三の先生方の慶弔記事、句集等出版関係記事、昨年以来の人事異動報告などです。玉稿をお寄せ下さいました先生方の御好意に報いるべく、次の83号をなるべく早く編集し、来る3月中にでもお手もとに届けるよう努力致す所存です。

水道管等の工事のため、医学部キャンパスには久しぶりに春泥の風景もみられます。皆様の御健勝をお祈りします。(村山記)

注意「千葉大学新聞」なるものは本同窓会とは無関係です。

編集後記